

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.58 2012.1..15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で63年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

工 エンタツ この間、蓄音器会社から、僕を呼びに来た話を知ってるか？
ア アチャコへえ、用事は何か？

工 さあ、行って見ると——有名なスポーツ選手の声をレコードに吹き込んで売り出すと言う訳や。

ア 成程、君にその相談か。
工 候補に上つてるのが、ホームラン王の川上哲治と、もう一人は水の王者の古橋廣之進。

ア そら、古橋選手なら、よう売れるやろう。

工 処が僕は頭から反対した。水の王者では売れるどころか、会社がつぶれて仕舞う。

ア そら一体、どんな訳でや？
工 だって、古橋選手が名を挙げたのは何やと思う、レコード破りやないか！

ア そんな阿保な、何がレコード破りや。

工 だから僕は、レコード会社が大きい売り出そうと思うのやつたら、吹き込むのは川上選手の方に限る。……

ア それなら、儲かるか？

工 その筈で、野球の打撃王なら、ヒット盤になること疑いなしや。
ア おい、人が本気で聞いているのに、もつと真面目な話が出来んか。

工 こら、失敬、真面目と言



えばこの頃のスポーツ熱のえらい盛んなことはどうや。

ア うん、日本野球を始め、競馬、拳闘、相撲、さては自転車競走——皆、とても大した人気を呼んでる。

工 近くは、犬の競争まで始まるんか言う話や。

ア その上、次回のオリムピック大会(昭和27年・フィリッパインズのヘルシンキ)には参加が出来ると言うので、今や運動競技が目に見えて活発になって来てる。

工 しかし、そうした色々の運動の中で、特に最近盛んなのは何やと思う？

ア 何が、一番に盛んや？

工 外でもない、それは労働運動や！

ア 労働運動？ そんな運動が野球なんかと一緒に出来るか？

工 出来るとも。——どっちも狙うてるのはストライキやないか。

ア え、ストライキ？

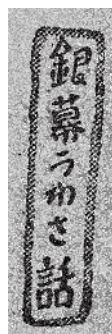
工 そうや、野球の場合はホームランをかつ飛ばそうとストライキを狙ってるし、労働運動の場合はストライキを狙って一挙に悪い労働条件を葬らん！

ア えらいホームランや。

工 そして、ストライキを打って出たら労働運動も野球と一緒に、最低生活費のベースをちゃんと踏まんことには、元氣よくホームに還って行くことが出来るん。

ア 成程、成程。(後略)

マサに実感



「晩春」という小津安二郎監督久々の作品では、原節子が嫁入り前の若い娘にふんして、笠智衆の父親としみじみとした親子の愛情をスクリーンに展げる。もちろん、原節ちゃんはまだ独身で、その役柄通り嫁入り前なのだが、目下恋人もいいなすけもないので、そうした結婚直前の娘の気持はどんなだろうと、丁度近く谷口千吉監督と結婚するという後輩の若山セツ子とこへ教わりにいった。ところがアニ計らん、セツコ邸には当の谷口監督が遊びにきていて、セツコ嬢は節子嬢のお相手よりも千吉君のお相手に夢中、帰ってきた節ちゃんにお姉さんが「どう、すこしお芝居の参考になつて、」「ウン、何だか私も結婚したくなつちやつた」

小津安二郎(1903~1963) 東京生まれ。「小津調」と称される独特の映像世界で、世界的にも高い評価を得ている。
若山セツ子(1929~1985) 東京生まれ。『青い山脈』で人気を博す。戦後第一期の東宝を代表する清纯派スター。

迷いの巷ちまなより

昭和二十六年師走、上野駅は乗降りの人々、汽車を待合わす人々で雑踏していた。そこへ、年の頃はまだ十八、九の、ケケババしい化粧の少女が、六才ばかりの男の子の手をひいて、困惑の表情であらわれた。少女は、折柄いあわせた婦人警官のところへやって来て、

「私は、東京でつとめていましたが、今日結婚のため、田舎へ帰らねばなりません。この子は、私が東京で或る日浮浪しているのを拾い、それから育てて来たのですが、この子をつれて嫁ぐわけにはいかず、かと言ってこのままここへ置き去りにするには忍びません。何とかこの子の行末の立つようにしてやって下さい」と頼むのであった。

もうこの頃は、物見高い人々が、婦人警官と少女と幼児を、人垣つくつてとりかこんでいた。

男子の警官も来た。

一同の意見は、「この幼な子を浮浪児収容所にいれるのは、あまりに可哀そうだ」ということになった。そこで、少女は群集に向つて、「誰か、この子を育てて下さる方ありませんか」と叫んだが、何十人もいる人々の中にも、誰一人引受けようという人はなかった。

その時、「私が引受けさせて頂きます」と、進み出た人があった。

「及ばずながら私が、この御子さんを立派な人に育てさせて頂きます」

と、可哀そうなみなし子をその胸に抱き上げたのであった。

感極まった少女は、忽ち涙をほろほろと流して、地獄で仏のこの篤志の人に対して、練り返し練り返し礼をのべた。

人垣つくつて見物していた人々も、共に涙をぬぐつて、このおきなごのために喜んだのであった。ところが、丁度この時、上野駅の一隅からこの感激の場面を



ランランたる眼つきで凝視していた一人の青年があつた。

彼は、二才で実母に死にわかれ、爾来継母の手で育てられて来た。そして父もまた十年前に死に、継母との仲は疎く、富裕税を納めている家柄にも拘らず家を出て、終戦後の東京において、慰めてくれる友とてもなく、ただ一人寂しい孤独の生活を送っていた。

世間知らずの身に東京の波風はあまりに冷たく、師走の寒空に身を守るオーバースラ今は無かつた。

この時彼の眼に映じたものは、進み出たその人のハッピー姿と、その背にあまり

にも鮮やかに染めぬかれた天理教の三文字であつた。

Tは、かつて天理教本部の所在地、おぢばにおいて学窓生活をおくつた経験があつた。その懐かしい憶出が、今一時に蘇つて来たのであつた。

「——そうだ、今あそこで抱き上げられた、天涯孤独の幼な子こそは、そのまま自分の姿ではないか、刀折れ矢つきた自分を、今暖かく抱いてくれるものは、天理教よりほかないのだ。神が今それを自分に見せて下さつたのだ」

未だかつて暖かい慈愛の手に抱かれた覚えのない彼が、三十の年になって初めて知つた尊い悟りであつた。

彼は涙を流しながら、自分が何をして、いるかもわからず、群集をかきわけて、そのハッピーを着た人の手を把り、「僕も天理教の者です。ありがとうございます」と名乗り出た。

それから二週間後、凡てを清算し、轍の音もかるく、おぢばへ向つて走る急行列車大和号の上に、修養科に入り、一生を救け一条に捧げるべく、感激と希望に胸をふくらまして、T青年の姿があつた。しかもお地場に着いて最初に彼の耳に入った「お話」は、御本部神前講話において、思いもしなかつた親不孝のお話であつた。

彼の母に対するひねくれた考えと気持はかくして次第に変わって行くのであつた。

聞書

(道友社刊「真実の道」より)

養徳社 よもやま話

○……「陽気ぐらし」って何？

お道の人なら誰でも知っている言葉が、そうでない人にはうまく伝わらないことがある。その一つが「陽気ぐらし」ではないか。陽気な暮らしはなんとなく分かる。でも、お道の陽気は、面白おかしく浮かれることではない。ならば、本当の陽気って何だろう——そう真剣に考えると、訳が分からなくなる。

ある先生が、信仰人生五十年にして、ようやく陽気ぐらしの入口に立った気がする、とおっしゃっていた。それは、何を見ても、何を聞いてもうれしい。何事が起こってきても、生きていくことがうれしく、幸福でたまらないという心境に立ち至った時、陽気ぐらしは成就されるという究極的な信仰だそうだ。

もちろん、それは容易にたどり着けない境地だけれど、日常生活の中で嫌なことがあったり心が曇ったりした時、せめて口に出して唱えれば、少しでも元気になる気がする。

「陽気は幸せの種」。天理本通りに新しく掲げられた養徳社のスローガンを今年一年、口ずさんでいこうと思う。

【青山文治画伯85歳作品展】

平成24年3月25日(日)〜27日(火)

天理本通り「ギャラリーおやさと」 主催・養徳社